

平城宮東区朝集殿院東南部（平城第 346・355 次）

現在調査をおこなっている朝集殿院は、平城宮東区朝堂院南域に位置し、朝堂での執務のために出勤してきた官人が、朝堂院南門の開門時刻まで待機する場所だったと考えられています。今回の調査目的は、奈良時代における朝集殿院の内庭部の状況と区画施設の様相を明らかにすることです。朝集殿院の内庭部と外郭部および東南外側に約 1500 m²の調査区を設定し今年の 1 月から調査を継続しています。

今回の調査では、東朝集殿南側の内庭部には平城宮に関わる遺構は存在しないことを確認しました。現況の遺構検出面は廃都後に削平されたもので奈良時代の地表面は残っておらず、古墳時代の自然流路のあとや大小の穴が見られます。この面の上層には平安時代から現代にいたる堆積土が、数層確認されました。朝集殿院の区画施設については、東面と南面を区画する築地を確認しました。また、南面築地の下層からは、掘立柱塼を検出しました。しかし、東面築地の下層には、掘立柱塼はありませんでした。

南面の掘立柱塼は基壇をとまっています。現況では掘立柱を抜き取った穴が約 9 尺（2.7m）間隔で確認されました。南面の築地はこの掘立柱の抜き穴を埋め立て、さらにその上に層状に土を重ねてつぎ固めた「版築」技法で築かれています。

また、築地の内側では雨落溝を踏襲した溝を検出しました。この溝は、東南隅の調査区で検出された東西方向の石組溝に続いています。石組溝は凝灰岩の底石と側石が残り、東面築地の下を貫いていた暗渠と考えられます。築地の雨落溝は護岸の石などは残っていないものの、暗渠と同様に石組であったも

のが、廃都後に石材が抜き取られたものとみられます。また、南面の溝の底部には、幅約 60cm の一段深い溝があります。この溝は東面築地の暗渠を設ける際に壊されていますので、築地に先行する掘立柱塼にともなう雨落溝と考えられます。

築地の雨落溝を踏襲した溝や内庭部からは大量の瓦が出土しています。これらの瓦は築地の屋根に葺かれていたものと思われます。軒瓦は第二次大極殿や東区朝堂院から出土する瓦と同型のものがほとんどでこの型式の瓦は、745 年に再び平城京に還都した直後の東区朝堂院の全面的な改造の際に新たに使用されたものです。したがって、掘立柱塼から築地への改築は、大極殿や東区朝堂院を礎石建瓦葺に建替えた時と同時期と考えられます。

奈良時代前半の朝集殿院東面の区画施設の位置はまだ不明です。式部省下層で確認されている掘立柱塼が、そのまま北に延びて朝集殿院の東面を区画する可能性も考えられましたが、朝集殿院東側の調査区（第 346 次）では、この南北塼の北端が朝集殿院の東までは延びないことを確認しました。この掘立柱塼とは別の掘立柱塼が朝集殿院の東面を区画していたと考えられます。また、調査区の西北では南北に並ぶ 4 本の掘立柱の抜き穴を検出しています。

この南北方向の柱列が、朝集殿院の東面掘立柱塼となる可能性もあります。ただし、この柱列では南面掘立柱塼と接続する東南隅の柱は、調査区西を通る市道の下にあたるため確認されていません。さらに別の東面掘立柱塼が、現在の水路か市道の下にある可能性もあります。

今回の調査により、奈良時代前半には朝集殿院の東西幅は朝堂院よりも広く、朝集殿院と朝堂院をあわせた区画が凸字形平面となっていたことが明らかになりました。奈良時代前半の朝集殿院の東西幅は、当時の尺で百尺単位の完数値とならない特異な状況だったと考えられます。今後、さらに周辺地域の調査を進め、また他の都城での様相の解明を待ちながら、朝集殿院と朝堂院の区画の変化の理由や意味を追究していく必要があると考えています。

なお、現場説明会は 6 月 14 日におこなわれて、雨のなかにもかかわらず 350 人余が詰めかけました。

（平城宮跡発掘調査部 山本紀子）



東面築地下の暗渠の底石（東南から）